

英國に息づく
ホスピタルラジオ

小川 明子 Ogawa Akiko 名古屋大学准教授

病院ごとに放送局が

ホスピタルラジオとは、英國を中心に英語圏に広がるボランティアベーラスの活動である。比較的大きな病院の中、あるいは外に小さなスタジオを設け、有線あるいはWi-Fi、端末などを用いてベッドサイドのイヤホンに繋ぐ。そこで語りかけるのはボランティアのDJたちだ。入院中の患者が気晴らしになるような音楽を流したり、地元スポーツチームの勝敗を伝えたり、患者や家族、友人や病院関係者からリクエストやメッセージを募って紹介したりもする。放送は週末の夕方だけという局

もあれば、毎日定時に放送している局もある。内容もサッカー中継や音楽、トーナメント番組、ビンゴなどのゲームなど局によって実際に多様に工夫されている。共通しているのは、運営が地域のボランティアであること。そして彼らがリクエストやメッセージを集めに病室を回り、それをもとにDJがラジオ番組を放送する様式だ。

英国のホスピタルラジオ全体の歴史について書かれた文献は、管見の限り見当たらない。ウェブ上でホスピタルラジオの歴史をまとめたグッドウイン氏によれば、英国で最初に

一ヶ郡の病院で、1926年に七〇〇のスピーカーと二〇〇のベッドサイドイヤホンが準備されるところから始まつたとされる。BBCの開局が1922年であることから、電波や放送への関心が高まっていた時期にこうした活動が始まつたというのはさしあたり納得できるだろう。当時は患者がサッカーの試合結果や教会の礼拝を聞くことが目的だったようである。この制度は1930年代に普及するが、第二次世界大戦中には電波管理が厳しくなつて新たな開局はなく、その後の本格的な普及は戦後となる。1946年には、スコットランドの二つの放送局でスポーツ

中継が始まり人気を呼んだというが、これはそれ以前から行われていた視覚障害者への中継サービスが転用されたようだ。スポーツ中継は人気のコンテンツであり、傷痍軍人へのチャリティ活動を行っていた慈善団体T.O.C・Hも、その中継を通してホスピタルラジオの普及に関わったとされる。

1980年代には三〇〇もの局が番組を放送していたというが、その後、小さな病院の局は徐々に閉鎖、併合されて数が減り、またインター ネットの台頭もあって、現在はホスピタルラジオ連盟（H.B.A）に登録しているのはおよそ二〇〇局であ

る。連盟では年に一度、総会を開いて優秀な活動やDJを表彰したり、新たな技術のトレーニングなどを実行している。とはいえ、局の運営は基本的に各局独自に行っており、資金調達やボランティアの仕事内容、番組編成などは局によって実際に多様性に富んでいる。

送信のしくみとシステム

従来はケーブルでヘッドサイトまで繋いでいたが、現状は局によつて異なる。サウザンプトンのホスピタルラジオの歴史について記述した書籍によれば(Stubbs, 2002)、同局では町の再送信業者に頼んで有線でシステムを整備していくたという。筆者の聞き取り調査でも、実際、多くの局が同様に病院内に有線を這わせていったようだが、2000年代に

局、また五局が低出力のFM波を用いて放送している。それ以外は有線での放送、あるいは院内のWi-Fiを用いたシステムとデバイスの貸し出しという方式で放送している。コンピューターを用いた自動創出のシステム化なども各局で進んでおり、二四時間放送が可能になつているところも多い。ホスピタルラジオ協会

いったため、無料のイヤホンを繋げて聞くという聴取方法は継続していく。設備もかなり古いものを用いているが、当分は「患者のため」という目的のもとで放送を続ける予定で、大きな不満はないという。

入つてからはベッドサイド・リクリエーション供給会社「Hosped ia」のシステムに統合されている場合が多いようだ。Hosped iaは、患者がベッド上でスクリーン形式の画面で映像や電話、インターネットなどを楽しむことができるシステムで、有料でテレビやビデオが

の調査では、回答局の92%が二四時間放送を行っているという。

も上記の二つの病院を例に紹介してみよう。ボーンマスでは、地元商業放送局と衛星チャンネルSKYから年間一五万円程度でニュースやスポーツ中継を自由に使える権利を購入しており、定時にはニュースを、またサッカー中継などを編集しながら生放送の番組に織り込むなど、日本



▶無料のイヤホン(ラジオ・プロツクリー)

